

《巻頭言》

激変する世界と福音主義キリスト教

一九七〇年四月に設立された福音主義神学会は、この激変する世界の中を十五年間無事に生きつづけて今日に至りました。この神学会の設立に指導的な役割を果たした教職たちはほとんど三十代後半から四十代前半であり、その若さとエネルギーの故に時代の激変によく対応できました。理事長を就任順に挙げますと、矢内昭二、榊原康夫、宇田進、服部嘉明、佐布正義、鍋谷堯爾、丸山忠孝となります。佐布先生、丸山先生以外の五名は創立総会の時に理事に選ばれています。鍋谷先生の時までの十二年間は、学会が会員数を増やし、組織を整え、諸活動を軌道に乗せ、福音主義神学会が名実共に学会として充実してゆく基礎固めがなされた時代でした。七代目の丸山先生に至って一世代若返りましたが、理事会全体としては左程返りが実現していませんために、八代目の安田に至って再び古い世代のものの登場になりました。福音主義神学会が、激変する時代に対応する営みを創造的に継続してゆくために、理事会全体の若返りを実現させなければならないと思います。

福音主義神学会は総立の時以来、次の三つの根本的確信を持ち続けて今日に至りました。

- 一、聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教は、真理である。
- 二、福音主義キリスト教は、厳密な学問的解明と弁証を要求し、またそれが可能である。
- 三、健全な教会の形成と強力な福音主義宣教のため、福音主義キリスト教神学は、必須である（「福音主義神学」創刊号「発刊の辞」理事長 矢内昭二）。

世界がどのように激変しても福音主義神学会は、この三点の根本的確信を変えることはありません。もしこれを變更するようであれば、福音主義神学会はもはや福音主義の名に値しないものになります。しかしこの三点をどのように展開するかというプログラムになりますと、時代によって大きく変化すると思います。

第一の点についていえば、聖書の十全靈感を信じることは、本会規約第三条（立場）に明示されているように、本会がもつ唯一の教理的基礎です。この立場に立つことのできる福音主義者は、他の教理的立場に相当の開きがあってもこの神学会の会員として一致できると考えられます。しかし過去十五年間の歩みが示すように、この一致点においてすら、我々の間にあるのは決して一枚岩のイデオロギーでないことを明らかにしました。聖書論は絶えず問い続けられました。特に一九八三年の第二回神学研究会議の主題は「今日における福音主義聖書論」でありました。この時コオディネーターの大役を果たされた服部嘉明理事は「福音主義神学」第十五号の序文「いま（吟味）」と、これから（期待）」の中で次のようにしるしておられます。

「日本福音主義神学会が聖書の充全靈感を前提として主張する福音主義のものとして、靈感と權威、及び無謬性／不可謬性／無誤性を基底とした独自の聖書論（釈義の方法論をも含めて）の構成展開が必要である。しかも、その場合、独自であることは、キリスト教界の別の立場／主義／理解をもつ人々と、どの程度共通の土俵をもちつつ展開するのか、それとも、福音主義神学、特に、聖書の充全靈感を前提とした權威を主張し、正典としての聖書六十六卷の無謬性／不可謬性／無誤性を高唱する立場から、完全に独自のものを構成展開するのか、自問しなければならぬ。」

激変する世界の中では、聖書もまた激しく問われますから、福音主義キリスト者は、本当のものが明かになるための苦しい努力を今後も続けなければなりません。

第二の点について、本会が学会の名に恥じないレベルと、福音主義の立場からの十分な弁証をどのようにしたか

という評価が卒直になされなければならないと思います。本号に書評が掲載される予定と聞いていますが、本学会員である春名純人教授の労作「哲学と神学」は、福音主義者の学問的営みに対して重厚な哲学的基礎を与えるものであります。今後はこの哲学が学会の中で消化発展されるために、活潑な討論が起らなければならないと思います。激変する時代に福音主義者として堅く立ちつつ、現代の思想に対して明確な弁証をなし得るために、我々はしっかりと哲学的基礎を身につけなければなりません。

第三の点である神学と教会形成と伝道の関係は、本学会員の過半数が牧師で占められていることから最も強く意識されてきました。本学会員がそれぞれ所属しているキリスト教諸教派には異なった伝統があり、それに基づいて、今日の激変する世界に対する教派的対応がなされています。それらのものはかならずしも学会の共通の話題にはならないかもしれません。しかし、教職、信徒がそれぞれの教会において体験していることが本学会にも反映され、福音主義キリスト教神学がどのような形で教会形成と伝道に用いられているかということがもっとよく明らかにせられることが望ましいと思います。

第三回神学研究会議も間もなく開催されようとしています。今回のテーマは「福音主義の聖書釈義と説教」です。釈義と説教こそ、激変する世界のただ中にある教会の日々の営みです。ここに今日に生きる福音主義キリスト教の真の労苦があります。問題が卒直に示され、建設的な討論をもって新しい時代に向けて福音主義神学会が飛躍する時に備えたいと念願します。

一九八五年七月

日本福音主義神学会

全国理事長 安田吉三郎

〔書評〕

神原 康夫著

「コリント人への第一の手紙講解」

一九八四年 聖文舎

久保田 周

評者が専門としている学問が比較思想論の領域である関係上、必ずしも本書の適切な書評を述べることのできる立場にないことを予めお断りしておく。比較思想的な視野から聖書の注解なり講解なりを見る（広い視野から眺めることができる）という特権ともいえるべき立場があるとも考えられるが、本書のごとき重厚にしてまた生き生きとした形での（礼拝時における説教よりフィードバックした）大著を目の前にして、しばし呆然とさせられた、それ程圧倒的な迫りを覚えたというのが偽りのない実感であった。

著者の講解に対する方法論ないし学問的な領域は、著書全般にわたって随所に見られるように、改革派の伝統の中で生気をもっている。コリント書そのものが周知のように、牧者の側から見れば牧会上の、信徒の側からいえば教会生活（信仰生活）上の具体的な実例を抽出して論ぜられている関係上、著者は教会戒規の問題に力を入れているように見受けられる。同時にギ

リシア・ローマの当時の政治的社会的背景に基づく人々の社会性（倫理・道徳観）に言及し、さらに遡ってユダヤ教の律法解釈や倫理観にまでその輪を広げて、コリント書全体に反映しているパウロの真の思いを追及している。著者は初めにこの書は講解であって講解説教ではないことを断っておられる。従って内容的には必ずしも読み易いとはいえない。本書は『電車の中で読んでわかる話』ではなく、『机の上で読み、参照すべき聖句を読み合わせて、やっと趣旨がわかる』のだと述べている通りであって、それだけに聖書をノーハウ的に読もうとする者がある意味では批判しているといえる。今日、私共はノーハウよりもノーホワットを追及しなければならないといえるだろうし、このような視点から日本の教会がヨーロッパの教会でないという意識の上に立ちつつ、しかも統合をめざして地球全体のオイクメネー精神を貫かねばならないとしきりに思う。

本書が日本の教会の信徒に対して自分達のリアリティに根差した聖書解釈を施し、「講解」という立場を取っていることは真に喜ばしいことである。さらに本書では翻訳聖書を数多く引用し参考にしていく。それは一つの解釈としてそれらを見ることにより、幅広いキリスト教の立場が理解されることを狙っている。個人の注解書が主観的であるとするならば、翻訳聖書は或る程度広域的であり客観性を保有していると考えて差し支えなからう。従って本書の訴えは、（一）より深い言葉の解釈上の追求、（二）周辺の政治的経済的社会的関係による文書を

通しての裏付け、（三）キリスト教史二千年における流れの中での聖書の言葉の表現、である。縦横無尽にこれらの観点に立って、初めて日本人がコリント書を読むということが成立する。おそらく著者は礼拝の講壇において会衆を前にして自らを神に捧げきり、自己を無にし、パウロになりきったところで聖言葉をとりつがれたのではなからうか。これだけの背景を持つ講教に限られた短い時間にメッセージとして訴え伝達することのできる余裕を、世の牧会者・説教者は十分に学びとらねばならないのではないか。

本書の講解の体裁は次の通りである。（一）表題、（二）聖句の提示、（三）短い全般的な解説、（四）分割された聖句の範囲とその表題、及び内容の展開、となっている。一例を示すならば、一七〇頁で三・一八―二〇の部分の講解に対し、「自分を欺くな」という見出しがあり、次に前記聖句の提示、次いで短い解説、『ここで「この世の知者」（一八節）「この世の知恵」（一九節）」という問題が再び出てきます。ですから、この段落からあとは、一七節までの教会形成の教に直接続いているのではなく、むしろ一章一八節以来の議論全体をまとめようとしているのです』が与えられている。さらに「だれも自分を欺くな（一八節前半）」、「愚かになれ（一八節後半―一九節前半）」、「と書いてある（一九節後半―二〇節）」の三区に分け、それぞれにおいてその聖句の箇所における問題点が指摘され論議されている。著者の狙いは、既に述べたようにあくまでもパウロ

の側に立ち、その時代の実情をできる限り知識として把握しつつ、聖句の真意を理解しようと努める。原語であるギリシア語の意味の活用範囲を考えること、その言葉の持つ伝統的な意味合いを色づけること、さらには事柄の究極的な実践を追求すること等が展開されている。一口にいつて著者の講解に対する姿勢は注解的であるともいえる。注解と講解の区別をどのように定義すればよいのか、評者がそのような初步的なことすら理解していないとのそしりを免れないが、一般論でいえば講解は注解よりも比較的事物の展開が自由であり、広範囲にわたって聖句を考えることができるといえる。評者の私的な見解では、一つの聖句に対して（一）原語における意味論的追求、（二）文脈上の把握、（三）索引による並列的考察の三つの立場における吟味が重要であると考えている。著者はその点評者の考え方と期せずして一致するものである。『聖書の単語はみな辞書にありますが、辞書が神の言であるわけではありません。文脈が大切です』（一七四頁）とか、『ここで「悪知恵」と訳されるギリシア語「パヌルギア」は、「万事（パン）」を「なしとげるもの（エルゴン）」という意味の複合語で、どんな事でもできる能力と知恵を表わします』（一七五頁）という著者の言葉には、聖言葉に対する肉薄が感じられて好感を持つものである。

評者がコリント第一書において常々関心を抱いている箇所における著者の見解は見事なものであった。一・一八の「十字架の言（ロゴス）」は、十字架架の内容、教理と考え、共同訳の「十

字架の教え」に賛成している。私見によれば、ロゴスはギリシアの世界では規範、道理、教理、方法、言葉等を表すのであり、此処では「十字架の教え」というよりは「十字架の道理」ではないかと思う。勿論著者は「十字架の道理」との理解で実際に講解しておられる。「体系化された神学の教理ではなくて、生活の現実である」(八一頁)という表現にのみじくも「十字架の道理」を表明している。

コリント第一書において最も難解の箇所といわれている七章では、著者の見解は伝統的な線で押し進められているように見える。七・三六以下の問題については従来より「おとめ」と「ある人」をめぐって、三つの立場が提示されてきた。即ち(一)伝統的見解、(二)婚約者説、(三)霊的結婚説の三つである。それぞれ一長一短の中身をもち、それ故にこのような場合は伝統説に立つことが目下の所必要であるとの見解を示しておられる。この点評者は従来から霊的結婚説に立つて釈義を試みてきたので、なお一層の検討と示唆が与えられ有益であった。読者にしてもとく誤解を招き易い難解の聖句に直面して、それを逆手に取られてとんでもない方向に人間の生活が正當化され、墮落へと落ちこんで行きかねない昨今の世相を顧みる時に、著者の丁寧な講解は好感のもてるものである。それにして著者は過去の特定の学者がもっていた意見がこうであるという風な書き方をせず、専ら翻訳聖書の訳し方の違いに眼をつけ、翻訳には解釈が当然含まれているとの立場から切り込ん

でいる点に際立った特徴があるといえよう。最近聖書学者の仮説を前面に掲げ、教会員の聖書による信仰の育成とは随分懸け離れて、どんどん一人歩きをしている実状を見る時、我が国でもさらに良い翻訳聖書が産み出されてくる事を願うや切である(最近出版された「新約聖書」柳生直行訳では七・三六以下は婚約説を採用している)。

次に一五章を考えてみると、ここで重要な事はパウロの「よみがえられた」という言葉の使い方が特に完了形であって、他にその用例を見ない事を評者は指摘したい。著者はこの件についてはなんら述べてはいない。ギリシア語の完了形の扱い程日本人にとって分かりにくいものはない。セム系の人々は完了と未完了だけで時間の経過を気にせず、ただ瞬間瞬間の行為の状況を描写するアスペクトに力を入れるメンタリティを持つ。印欧語族はそれに対してアスペクトに時間に加え、より複雑なものに変換した。時の流れの規定における一般的概念はそれ程古い歴史を持っており、我々はその複雑さに戸惑いをさえ感じるのである。いずれにせよ、ギリシア語の完了形をパウロはこの一五章でキリストの復活に関して意識して用いている。単なるアオリスト形でなく完了形であるという事は、田中美知太郎の表現を借りるならば、『完了相とは動作の結果生じた主語の状態を語るもの』(ギリシア語文法一四〇頁)の上に立脚しての事であり、イエスの復活は正に彼等の心の中に留まり、留まっ

示している。

コリント第一書全体はこの復活の章でクライマックスに達しているといえることができる。著者は五八節の「堅く立つて動かされず」について『ここでは、一五章全体、とりわけ五六―五七節で明らかにされた神学に立つて、という意味です。終末における復活が、過去のイエス・キリストの出来事からも現在のクリスチャンの信仰生活からも神学的にみて必然的な結論なのだから』(八一四頁)と理解されている。これは正しく著者の神学の重視を示しており、聖書に対する取り組みの明瞭な態度を現している。

限られた紙数の範囲で全体的に把握できずまた力量不足もてつだって充分な書評の責任を果たし得たとは到底思えないが、一牧会者としての感想を述べることを許して頂くならば、この種の自由な書き方による注釈書が様々の分野で益することの大きいである事を認め、著者の労苦を多とするものである。

(日本フリーメソジスト堺キリスト教会牧師・
大阪基督教短期大学教授)

ブライアン・グリフィス著
八木 功治 訳
「道徳と市場経済―資本主義と社会主義と」
とってかわるもの」

一九八四年 すぐ書房

東 條 隆 進

一、本書は「現代キリスト教ロンドン講演会」での講演内容からなっている。そのために、本書には長所と短所が併存している。長所は一般の人々に理解できるような明解さであり、短所は問題がそう簡単でないものまで強引とも思えるような仕方での割り切られている点である。しかし、キリスト教と経済ないし経済学の対話が真剣になされている点、問題が正面から取り組みられている点は高く評価されるべきものであると考えられる。

本書の構成は次のごとくである。第一章資本主義の危機、第二章マルクス主義の挑戦、第三章キリスト教の意義、第四章市場経済の改革、第五章第三世界の貧困と先進諸国の責任。

二、著者の基本的立場は、本書の副題にもなっているように、資本主義か社会主義かではなく、資本主義でもなく社会主義でもない第三の方向であるが、どちらかというと、社会主義

的でなく、むしろ資本主義的である。資本主義の欠点、市場経済の欠点をキリスト教的倫理・道徳で克服しようとする立場である。

さて、資本主義の危機は種々の現象を通して現われるが、真の危機は体制それ自体を支える「正当性」に関する危機である。体制にとって正当性が必要であり、それがあってはじめて体制は信頼と公正感を基に有効に機能しうる。従来、資本主義体制の危機は、マルクス主義、シュンペーター理論、科学技術の発展によるもの、政府の役割の増大による資本主義の行き詰まり論が中心であった。しかし、真の危機は資本主義と社会主義の双方の哲学的前提としてのヒューマニズムの危機にある。とくに自由市場経済体制を成立せしめる前提としての自由は放縱を生みやすく、市場経済を運営するに必要な個人の責任感といった強い道徳的基準を生み出すことに失敗する。市場経済主義のイデオロギーたるハイエク流の文化的進化論を土台とする自然発生の秩序としてのカタラクシー *Catalaxy* で市場経済を根拠づけることはできないと主張する。

三、そこで、次に第二章で「マルクス主義の挑戦」が分析される。マルクス主義は歴史哲学、経済理論、国家観・革命観の三要素からなっている。歴史哲学はヘーゲルに由来し、経済理論はリカードを中心とするイギリス古典派経済学、第三の国家観・革命観はシスモンディ、プルドンやサン・シモンのようなフランス系社会主義思想家の革命的伝統に由来する。中でも

重要なのが歴史哲学であるが、それは弁証法的唯物論であって、生産力・生産関係がすべての存在するものの土台であるという考え方である。この歴史哲学が資本主義体制における剰余価値現象の説明と、経済体制としての資本主義の存続不可能性、社会主義への移行の必然性を説明する経済理論と結びついて革命理論を生み出す。

このようなマルクス主義に対して著者は三つの問いを出す。マルクス主義は科学的か、マルクス主義は人道的か、マルクス主義は無神論か、と。マルクス主義は科学ではなく大規模な予言にすぎないということ、マルクス主義は必ずしも人道的でないこと、マルクス主義は宗教体系化した徹底した無神論であることが指摘される。

そして、このようなマルクス主義の思想から導かれる「実践」はどのようなものなのか。マルクス主義は私有財産の廃止、家族の廃止、宗教の廃止を主張するが、これと経済的非能率、宗教的迫害、政治的恐怖とは内的に必然的な関係があり、ユーロ・コミュニズムによって主張されている、自由を失うことなくマルクス主義国家を建設できるという主張を批判する。共產主義は自由を統制に従わせようとする結果、統制を十分に抑制できない点で失敗せざるを得ない。そして、その根本的矛盾はヒューマニズムにある。

四、かくして、今日必要なのはヒューマニズムにかわるキリスト教信仰である。第三章でキリスト教の意義が語られる。と

ところで、従来のキリスト教には三つの立場があるが、第一はキリスト教と経済的諸問題の関係が間接的であるという議論である。今日、今世紀初頭の社会的福音に対する批判がなされているが、著者は社会的福音の神学は個人の救いの重要性を軽視する点と社会機構を考察するさいに罪の重要性を軽視する点が不適切であるが、われわれが住む世界に可能なかぎり直接福音を関連させようという点は評価されるべきである。と主張する啓蒙主義的世界観の結果としての現代社会科学の自律権の妥当性を問いたです。ここキリスト教の最重要任務であるからである。第二のアプローチはキリスト教信仰を著しく個人的なものと考え、個人の心・霊の問題は社会とは無関係であるという議論である。真の霊性重視は物質的世界の放棄を含むという考え方から、一組の原理を個人レベルに適用し、別の一組の真理をこの世の事柄に適用するという二元論をつくり出し、これが新しい修道院生活としてのクリスチャンだけの共同体という考え方を生み出しているが、これは福音の誤解である。第三はラテン・アメリカの状況から生まれた「解放の神学」である。今日ラテン・アメリカに存在する不正と抑圧、それがマルクス主義的枠組みで分析、展開されてきたが、キリスト教の立場で把え直そうという試みである。キリストの受肉において神がすべての人類をあらゆる種類の奴隷状態と不正から解放することを宣言された事こそが福音の本質であるという考え方である。

歴史とはキリストが宣言した解放が全世界において現実とな

る過程である。したがって解放の神学の展望は徹底的に歴史的である。その結果、行動の優先性が大いに強調される。しかし、これには認識論と救済論からみて重大な欠点がある。解放の神学は人間が行爲者として含まれる具体的に歴史的な出来事以外に、あるいはそれを越えて真実はなく、それゆえ歴史への参加を通じて世界を改革する過程における行動それ自体のほかに知識はないということであって、これは聖書における啓示の重要性を不当に無視する結果を生む。救済についても、純粋に現世的観点から見られ、正義の追求と同義語にされ、「正義をもっぱら追求する貧者や弱者の叫びの中で知られる」と述べられる。その結果、霊的かつ道徳的次元が見失われてしまう結果になる。

このような現代神学の反省から著者は、聖書を教義と人生上の問題の究極的権威と考え、五つの観点から、すなわち創造と墮落、イスラエルの政治経済、神の国とイエスの教え、初代教会の生活、終末的希望、という観点から考察する。そこから経済生活に対する現代のキリスト教的ガイドラインを導き出す。

第一に富の創造に対する積極的命令があること、第二に国家的・社会的、あるいは集团的所有制よりも、私有財産制が社会についてのキリスト教的基準である。第三に各家族は経済生活に永久的なかわり合いをもたなければならない。第四に経済的平等の追求よりもむしろ貧困の救済と除去とがキリスト教的関心でなければならない。第五に経済的不正はただされなければ

ばならない。第六に物質主義に対する絶えざる警告がある。第七に責任と審判とは経済生活にとってなくてはならない部分である。

五、以上が本書のいわば理論編であって、このような神学的、社会経済的立場で、第四章、市場経済の改革、第五章、第三世界の貧困と先進諸国の責任、が論じられる。

著者は社会主義的計画経済よりも市場経済の方がキリスト教的であると考え、「キリスト教的正義に制約された市場経済」のあり方を追求する。国有経済に対する市場経済の優越性は両体制のもつ能率の比較ではなく、人間性の比較に基づくものである。著者によれば現代、とくにイギリスは「組合福祉国家」Corporate Welfare Stateとして特徴づけられるという。この組合福祉国家は法人企業と政府と労働組合の間で契約されている国家であるが、この下で私企業体制に対する攻撃がなされ、平等主義が集産主義への傾向と結びつき、それがルールの重要性の軽視を生み、ヒューマニズムが危機に直面した。

そこで、現在必要なのはこの組合福祉国家の解体を含む改革が必要であり、キリスト教精神に基づく倫理的変革が市場原理の援用によってなされるべきであると主張する。

そして、最終章では、南北問題が現代のキリスト者の世界史的使命から考察される。一般に南北問題はレーニンの「帝国主義論」の論理で取り扱われているが、著者はこのようなアプローチの不毛性を説き、むしろ理論的には新古典派的立場に立

しかし、問題になるのは南北問題、第三世界に関する論及である。たしかに、今日、レーニンの「帝国主義論」を直接適用することの不毛性は著者のみならず多くの論者の指摘するところである。しかし、著者のように新古典派的立場から、しかもキリスト教神学まで動員して、西欧の無罪性を主張し、市場機構を弁護した例はあまりないように思われる。そして、その理由は、歴史解釈にあるように思われる。

すべての責任は啓蒙主義以後のヒューマニズムに求められ、とくに十九世紀後半の世俗運動に批判が向けられるが、はたして問題はそう単純なのか。著者の理解とは全く別に、マックス・ウェーバー等によって問われたのが、禁欲的ピューリタニズムが功利主義的資本主義に転化していったという「ディアレクティーク」であって見れば、矛盾はすでに啓蒙主義以前に始まったということになる。

そして、このような著者の理解は旧約的世界の再評価の下でなされているが、その結果、新約の固有の意味、とくに「神の国」の意味、あらゆる価値体系を逆転させたその意味が必ずしも明確でない。もし、「神の国」の福音理解がもつとつきつめられ、その神学が経済社会、歴史過程に展開されたなら、著者と異った解釈も可能であるということは指摘しておく必要があるように思われる。

(日本キリスト兄弟団下関山の田福音教会信徒牧会者・下関市立大学教授)

つ。第三世界の貧困の原因として広く受け入れられているのは先進諸国による搾取だという説明であり、新植民地主義、関税障壁、そして多国籍企業のような邪悪な諸制度の結果であるといわれているのに対し、このような批判は「まったくといってよいほどの外れだ」(一七八頁)と主張する。国際経済秩序はそれ自体として正義にかなうものであって、問題はむしろ「貧困にあつて不平等ではない」(一一七四頁)。そして貧困の原因は、政治的要因、経済体制の選択、文化といった非経済的要因に帰因するものであって、それは西欧の責任というよりも、第三世界の側の責任であると言う。

そして、このような非経済的要因に帰因する貧困問題はヒューマニズムによっても、仏教や儒教といった宗教によっても解決できないということ、キリスト教のみが任務を果たすことができる」と主張し、専門的知識をもって第三世界を援助し、世界伝道によって、この世界をキリスト教化することが必要であると主張して締めくくる。

六、以上、大まかな内容を紹介したが、冒頭にも述べたように、一般むけの講演であるので論点はきわめて明瞭である。そして内容的にも市場経済や社会主義に対する批判、市場経済の改革の方向についても今日ほぼ常識になっており、特別問題はないように思われる。その改革の土台にキリスト教精神をすえんということも、キリスト教の立場から当然であるといえよう。

春名純人著

「哲学と神学」

一九八四年 法律文化社

市川 康 則

本書著者春名純人教授はカント哲学研究の専門家であり、同時に、キリスト教有神論の立場からこの哲学体系と根本的に対峙しつつ、しかしその真理契機をキリスト教的に変換、昇華することによって、理論的全体の実在観としての哲学の確立を企図しておられる。カルヴァン主義キリスト教哲学・弁証学の研究家である。本書は、大学紀要や諸機関における発表論文など、著者のこの十数年間の研究業績の一大集成であり、奉職される関西学院大学研究叢書第五十篇として公刊されたものである。

本書は三部から成るが、その内容は、カント哲学、就中その道徳神学研究、近代神学についての批判的考察、およびキリスト教弁証学・哲学の確立の基礎作業という三重の内容である。そして、全体に貫徹している得本的動機ないし狙いは、いわゆる超越論的認識批判によって近代哲学的思惟の確立に決定的役割を果たしたカントの倫理的二元論がいかにその後の西欧哲学

とこれに規定された近代主義神学および、現代神学とを根本的に規定したかを批判的に洞察し、これを踏まえて、カントの提起した重大な哲学的課題を、その近代主義的プロテスタンティズムの立場ではなく、歴史的、宗教改革的立場、就中カルヴァンからカパーを経てヴァン・ティル、ドゥイウェールトに到る改革主義的路線において把え、確立することである。

従来この種の研究においては、個々の神学者や個々の教説を取り上げて論考、批判するタイプのものが多い中で（例えば森田雄三郎著『キリスト教の近代性』、佐藤敏夫著『近代の神学』、武藤一雄著『神学と宗教哲学との間』など）勿論これらはいずれもそれ自体においては洞察と示唆に富む力作である）、本書は、個々の学者や所説を論じつつも、常に全体を一つの根本的、統一的視座において把握し、しかも各々の場合に原著を綿密に詮議し、十分な資料的裏付けをすることによって、単なる思弁的論理的な一貫性に陥ることを免れている点で、独特である。

* * *

本書第一部「カントの道德神学」においては、「カントの純粹理性信仰」（序論）、「カントの道德神学」（第一章）、「道德的完全性の理想」（第二章）が説かれる。ここでは、カント哲学体系の中で「神」観念がいかに導出され、いかなる位置を占めるかが、またその神学が彼一流の哲学的認識論的規定を受けた、道德神学でしかないことが、明確に論述される。すなわち、

律的自己立法的道德的理性の立場とそれの投影としての神観とキリスト論がある。カントの認識論における輝かしコペルニクスの転回と共に、われわれはこの不幸な神学におけるコペルニクスの転回を看過すべきでない。また近代倫理学を基礎づけたカントは不幸にも近代神学をも基礎づけた」（一七頁）のであり、それゆえ、「キリスト教弁証学の立場から、近代神学批判を企図する筆者にとって、カントの道德神学研究とその批判とは、企図全体の序論となるものである」（二二頁）。そしてこのことが「カントの道德神学」をもって第一部となす所以である。

* * *

本書第二部は「近代神学の認識論的基礎に関する弁証学的考察」と題され、「近代神学の概念」（序）、「自由と自然」、「宗教体験」、「新しい歴史の概念」（それぞれ、第一―三節）が論究せられる。ここでは前記カント道德神学思想がいかに、表現やスタイルを異ならせつつも、近代神学者を根本的に規定しているかが、論証される。

第一は、近代神学とは、聖書の思维に基く歴史のプロテスタンティズムに對峙する、「近代哲学的認識論に基く近代的思维によって根本的に規定されている近代的プロテスタンティズム」のことであり、その近代的思维とは、デカルトにより確立され、カントによって決定的に印刻された「自然―自由」の対立的二元論的宗教的根本動因に支配された思维で、それはルネ

「純粹理性批判」において弁証論的仮象としてその理論的客觀的實在性を否定され、理論的認識（感性的直感において受け取られた認識素材に對する、悟性による概念化作用）の對象外とされながらも、なお理性の統整的使用の原理として、純粹理性の理想として許容された「神」が、『実践理性批判』においては、道德法則による意志の完全な規定（神聖性たる最上善）と幸福性との結合（最高善の実現）を可能にすべく、実践理性により要請されるべきものとして提示され、さらに『宗教論』においては、道德性の補完のための希望としての宗教の役割が積極的に展開され、人間の本性的根元惡の克服（道德的完全性の理想の実現）のための原型、また模範としての神の子（キリスト論）が説かれるに到る。そして著者によれば、このカント的道德神学の「理念（理性概念）↓理想↓原型↓模範」として図式化され得る構造こそ、「カント以後のドイツ觀念論哲学における宗教論を基礎づけた構造であり、これと密接に関連する自由主義神学を規定する根本構造となった」（二〇頁）。ここに挙げられた三著には、理論的認識の成立のための現象界と叡知界との區別に基く、純粹理性の理想としての神、感性的要素や傾向性の混入を避け得ない人間の意志の格率の、道德法則への一致のための、実践理性の要請としての神、そして根元惡に纏綿される人間の心術の革命としての道德的完全性における人間性の体现者としてのキリストという、共通の二元論的基本構造が看取される（二〇七、一二三、一七三頁参照）。「ここには、自

ツサンスの人間性の宗教に淵源する宗教性を持った思维である。方法的懷疑により思维する自我としての理性を再発見したデカルトに見られたものは、まず、あらゆる外的權威からの解放という自由動因であったが、この理性は究極的普遍的認識原理となり、すべてを合理的に説明する機械論的自然觀を生み出し、逆に人間の自由を脅すこととなった。カントは理性の無制約の適用に起因するデカルトの形而上学を拒否し、理論的認識の成立する領域（現象界）と道德や宗教の実践理性の領域（叡知界）に峻別して、こうして自然―自由両動因の調停を図った。信仰に場所を与えるため知識を制限したと言われる所以である。

しかし第二に、このことは後の近代神学の宗教や神学の理解に致命的影響を及ぼした。すなわちここでは宗教は神と人間（および世界）の關係としての中心的かつ包括的問題とはされず、カントによって備えられた一領域の問題と化することになった。シュライエルマッハーは合理主義神学およびカント的道德神学に對して、宗教の本質を思维や行為にでなく、感情に見たが、この感情は決して感性的、日常經驗的感性的なことではなく、「絶対依存感情」とか「敬虔自己意識」とか言われる、高次の生における宗教体験の感情のことである。同様に神学（教義学）も、あくまで人間の内的敬虔や根元的自己意識を明確にするための信仰命題（信仰論）として、また相対的、可変的概念や表象を常に新しくかつ適合したものにして宗教体験と

しての信仰の真理を擁護すべきものとして、理解されている。

第三に、ここからさらに、ヘルストに代表されるように、自然的科学的真理と区別された、内的生起的出来事としての宗教的真理が説かれるようになる。そしてこれはイエス・キリストの内的生に触れるときに生起し、イエスの人格性の衝撃が信仰者の内的生に新実在を覚醒させるのである。いわゆる聖書の高等批評の発達により聖書記述の史実性が否定され、従って聖書を理論的概念的認識の対象とする伝統的教義学も攻撃されるようになったとき、この宗教真理の内的生起としてのキリスト教の歴史性の概念が大いに歓迎されたのである。そしてこれは後のバルト、ブルトマン、R・リーパーなどに受け継がれて行く。

以上のように近代神学は初めから、自然—自由宗教的根本動因に支配された近代哲学的思惟に基く認識論に規定されており、カント的倫理的二元論を人間の生における宗教の位置の問題に適用した、二元論的宗教理解であった。

* * *

第三部「キリスト教弁証学とキリスト教哲学のために」では、まず「キリスト教弁証学序説」(第一章)において、ギリシャ、スコラ、近代の西洋における主要な三つの非キリスト教的哲学が、理論的思惟のさらに根底にある人間存在の宗教的根源的中心たる心を支配する宗教的根本動因の観点から、ドイユエールトに従ってそれぞれ批判的に分析され、これらとの対

峙において、キリスト教的宗教的根本動因の特性が明示される。次いで「キリスト者と非キリスト者の学的思惟における『対立の原理』」(第二章)において、伝統的な信仰と理性の問題が考察され、真の対立は信仰と理性の間にあるのではなく、再生的信仰と非再生的信仰との間に、従ってまた再生理性と非再生理性との間にあることが論証され、さらに再生者と非再生者の間の認識論的、倫理的共通領域がないことがカイパー、ヴァン・ティル、ドイユエールトの所説を引きながら克明に論じられている。そして「キリスト者と非キリスト者の『関係の原理』」(第三章)において、カルヴァンの心と神の像の教説に関する厳密な考証を経て、再生者と非再生者の間のポイント・オブ・コンタクトの可能性と重要性、両者の間の存在論的、形而上学的次元での全実在領域の共有性、そこから非キリスト者の学問や文化に対する正しい理解(批判と評価)のための視座が明示されるのである。

既に紙幅が尽きたため、第三部は殆んど触れられなかったが、しかしここは著者の、第一・二部を踏まえた上での、将来の、そして本来の研究課題(超越論的思惟批判を経て理論的全体的実在観としてのキリスト教哲学を確立し、それによって異教的文化や思想を批判かつ凌駕するキリスト教弁証学を提供する)に向かうための重要な基礎付けであり、第一歩である。

* * *

本書は、哲学史においてカントの占める位置や意義を十分に

理解した上で、カントにより提起せられた重要問題を、キリスト教的根本的立場において受け取め、それに批判的に応答しつつ、真の回答を建設、提示すべく企図されたものであり、それをこの道の偉大な先人たちの路線に立って遂行せんとするものである。これは決して紙幅制限付きの書評の対象などではなく、読者諸賢が各々熟読玩味すべき、緻密な立論と豊富な資料と研究に対する信仰的情熱とが結晶した一大労作である。

(日本基督教改革派 千里山教会牧師)

カール・F・ヴィスロフ 著
鍋谷 堯 爾 訳

「マルティン・ルターの神学」

一九八四年 いのちのことは社

黒川 雄 三

本書の著者カール・F・ヴィスロフ博士はノルウェーのリバール運動を背景に持ったルター派神学者である。博士の著書は、日本語で出版されたものでも「キリスト教教理入門」「説教の本質」「現代神学小史」「ルターとカルヴァン」等があり、日本のキリスト教界でもその貢献は小さくない。

著者が本書において意図したところは、ルター神学の全貌を伝えることではなしに、その重要点、それも今日の意義を持っていると思われるものを紹介することである、とされている。

まず、第一章「ルターについての多くの見解」においては、プロテスタント、カトリック両者における様々なルター観の変遷が紹介され、ルーテル教会内においても思想や態度の変化に伴って、正統主義時代には純粹な教理の先駆者として、敬虔主義時代には祈りと信仰の人物として、啓蒙主義時代には中世の迷信に反対した人として、またドイツ愛国者として、現代では

実存的神学者として、また同時に聖書批評学の先駆者として尊敬され、評価されてきたことが示される。

激しい嫌悪の対象とされていたカトリック教会内におけるルター観の中にも、ルターに対して同情的な見方が現われつつあるが、その神学的立場は変っていないという指摘は、宗教改革者たちの精神と戦いを忘れそうになる私たちに對する警鐘となろう。

第二章「宗教改革のあけぼの」においては、彼が福音的な信仰に到るまでの経過がたどられ、ルターの人と神学を知る出発点が提供されている。第三章「ルターによってもたらされた『新しいもの』」では、それが、教会の道德的腐敗や、政治、経済上の悪徳の改革とか、「聖書のヒューマニズム」運動、ドイツ語聖書の翻訳ではなしに、「信仰のみにより、キリストのいさおのみによって救われる」というメッセージを発見したことであり、それは実際には、全く新しいものではなくて、昔から聖書に記されていたものであることが指摘される。

第四章「聖なる光——律法と福音の区別」、第五章「最終權威としての聖書」、第六章「義認論」、第七章「恵みの下にある生活」、第八章「恵みの手段」、第九章「洗礼」、第十章「聖餐」、第十一章「教会」、第十二章「教会の教職者——ミサの司祭か、みことばの宣教師か」、第十三章「靈的統治と世俗の統治」、第十四章「誤った教えについて」において、特にカトリックの教えとの対比においてルター的神学が、豊かな資料の裏付けによ

って示されている。

以上の各章において、特に同時代の福音派の教えと、またカトリックの教えと、そして更には、現代の自由主義神学と対比して語られることから、読者は、それぞれの神学の再検討へと導かれることになるが、著者はルターの見解や意見を読者に要求することをしない。むしろ、本書を通じて繰り返し述べられる次のような言葉が印象づけられ、ルターおよびルターの精神を受けつづ著者の神学的態度から最も多く学ばれることと思う。著者は云う。「私たちは、ルターの見解や意見に縛られる必要はない。ルター自身、そのことを再々強調した。今は、あ

る牧師たちは、古い慣習を採用しようとし、ルターのことばをししばし引用する。このような場合、まずなすべきことは、古い慣習をもう一度採用する時、それが聖書的であるかどうかを問うことである。」(二二頁)

著者は、本書において、安易な、妥協によるエキュメニズムに對して警告を発しているが、また、自分たちの伝統・慣習に固執して、神学的反省を忘れそうなる者たちに、聖書に基づく真のエキュメニズムに對して心が開かれていなければならないものであることを教える書でもあると思われる。

田中剛二著作集第2巻

『カルヴァン——その人と思』

一九八四年 日本基督教革新派神港教会

岩本助成

一つのエピソードでこの書評を書き始めることを許していただきたい。評者はかつて、著者と共にKGKの講師を務めたことがある。著者の聖書講解はやはり定評通りのものであった。私が「ただ聖書からのみ」十字架を語った夜、著者はつと立つて静かに握手を求められた。それは、ひたすらに御言のみを講解し続け、御言のみによる教会形成に尽力された牧者が、後輩の説教者に与えた、千万言にも勝る励ましと慰めの握手であった。今、この敬愛する牧者に育まれた方々が、4巻の著作集をもつて師の業績を世に紹介された。これらの業績が、師がその生涯を通じて望んだように、「すべての栄誉を神に帰す」ことを知る故にである。そこにこの「教會的著作集」の意義がある。

著者、田中剛二牧師は、日本基督教革新派神港教会牧師として、又、神戸改革派神学校歴史神学教授として長年、奉仕された。高知教会副牧師時代、多田素のもとで旧日基的牧会訓練の在り方を体得した。プリンストンやウェストミンスターでは、

メーチェン、ヴァン・ティル、ウアーフィールド、カイパーなどの学問的影響を受けた。しかし一切の根底にあったものは、若き日、恩師フルトン博士の教導によって得た「カルヴァンとの出会い」であった。

本著作集は、第1巻『新約聖書の終末論』、第2巻『カルヴァン』、第3巻『ガラテヤ書講義』、未刊の第4巻『説教集』から成り、既に各巻とも高く評価されている。評者は前述の理由から、著者の本領とも云うべき第2巻『カルヴァン——その人と思』を取り上げてみたい。

本巻は、12編から成る論文、ベーズ著『カルヴァン』の翻訳、及び「カルヴァンの祈り」66編から成っている。論文の内、評者はまず、第11論文「カルヴァンの聖書の必然性に関する理論」、第8論文「カルヴァンとセルヴェット禁刑」、第6論文「カルヴァンの『教会規定余項』の主の晩餐と教会訓練について」の三編を取り上げたい。それらを比較することにより、著者のそれぞれの時期の関心事や円熟を、又、一貫している聖書信仰の課題や確信を知り得るゆえにである。

「カルヴァンの聖書の必然性に関する理論」は、帰国後、著者が新進気鋭の学者としてカルヴァンの聖書論の基本点を問うた研究論文である。カルヴァンに對するオリジナルな着眼点が光り、著者の生涯を貫いた聖書信仰の熱情がほとばしり出る。カルヴァンは聖書が神の言葉であり究極的規範であるとの大前提に立った。その点を説いた後、著者は聖靈感動 (inspira-

tion)と聖霊照明 (illumination)との混同を戒める。聖霊感動とは、機械的な逐語霊感説と異なり、聖書記者の行動の結果を示す「聖霊の全包括的な活動」を意味する。聖霊は聖書各巻の不同性を奇蹟的に統一し、一切の人間的な誤解より守りたもう。聖書の必然性の出発点は、「神に当然帰せらるべき栄誉が神に帰せられるが如き知識」である。人間の普遍的な墮落にも拘らず、墮落は人間が人間から墮落したことではなく、人間性の全的墮落のことである。sensus divinitatis は、再生を待ち望んでいる。自然啓示を論じた後、特殊啓示の中心としての「仲保者キリストにおける贖罪者なる神」を説く。しかも、キリストにおける信仰と聖書における信仰との二つは、聖霊の一行為であって二者の間に前後はない。ともに神の救いの恵みとして一つである。ここに著者の聖書信仰のゆるがぬ基盤を見得る。

第8論文は、時期的に前記の論文から十数年を経ており、歴史神学教授職への就任講演である。歴史神学者としての円熟を見ることが出来る。セルヴェート事件は誤解を産み易く、ひいてはカルヴァン像をゆがめ勝ちな事件である。著者はシャムペル丘上のセルヴェート事件記念碑の一句、「彼の時代の誤謬であつたところの誤謬を有罪とする。」を手がかりとして論じ始める。自由思想家セルヴェートの生涯と信仰内容を略述され、彼の裁判とその背景としてのジュネーブ議会の複雑な状況が明示される。この間、いわゆる「宗教的寛容」の問題も問われる。この事件でカルヴァンの責任が問われるとすれば、それは

聖書主義の躍動的な内容を歴史的に学び取りつつ、著者がその生涯の終りに至るまで説いて止まなかった教会的真理を明示する論文である。

以上の代表的3論文の他に、「突然の回心」subita conversione をめぐる研究がある。カルヴァンが「神の御手をもはや拒むことができないように、神の御霊に説得された」ことは何を意味するかを問う。著者は彼が聖職録を放棄した事実を重視するが、正鵠を得た解釈と云うべきであろう。御言の真理の戦いに立つことは、同時に福音のゆえに母教会と訣別することであつた。『靈魂の眠り』は著者自身が訳出していた程の愛読書であつた。主日の講壇と神学校の教壇とを守り抜いた著者は、正に本書を記したカルヴァン同様、人々を「御言の真理に連れ戻しキリスト者の魂を御言の約束の望みに燃やし励まし、その強い喜ばしい確信の上に彼らの全生活を堅く立たしめる」(二頁) 召命に生きた教師、牧者、説教者であつた。『キリスト教綱要』をめぐる3論文も、内容的にある種のだぶりを見せてつてもこの名著の要点を説き明かしている。

「カルヴァンと云えば、人々はただ二重予定説でしか彼を知らない。」と嘆いたのは、『カルヴァンの肖像』の著者パーカーであつたか。事実、カルヴァンはいわゆる書齋人ではなかつた。自ら避難民の生活を守って身体を酷使して牧会に専念しつつあの浩瀚な著作をのこした。そのような点からも、著者の第7論文「カルヴァンの結婚」は心暖まる著述である。『書簡集』

彼さえもその時代的狀況に生きざるを得なかつた限界ゆえに、「教会と国家との第4世紀以来の常態的結合を断ち切れず」、教会としての自律的行動を国家に対して貫徹できなかった点についてであろう。「第16世紀の誤謬の空気の中でそれを呼吸して生き」ざるを得なかつた点である。

カルヴァンはひたすらに「自由国家と自由教会の原理」を追求めた。相互補足的職能を尊重し合いつつ、教会と国家が自律の原則を一貫し合うこと——これがカルヴァン主義的原則として強調される(一四頁)。それはある学者が、今後の日本の教会のモデルを「領邦教会」に求めたのと好対照を示す。そう云つた意味でも、このくだりは味読されるべきであろう。「宗教改革における教会と国家——特にカルヴァンにおける——及び、「教会と国家」という論文においても同様に、「教会と国家との福音主義的關係」の基本点が説かれている。

次いで取り上げたいのが第6論文である。その頃、既に病いを得ておられた著者だが、草稿の文字は衰えていないとの由である。宗教改革史を論述しつつ、カルヴァンとジュネーブとの關係を描き、『教会規定条項』の内容を明示する。カルヴァンの教会改革の目的は、「キリストの体なる聖なる教会を建てること」にあつた(九三頁)。教会訓練は使徒的教会の中枢であり、聖餐禁止は教会訓練の中枢である。ひるがえって今日の教会の現実はどうであろうか。教会形成において、聖餐の正しい執行がどれほど厳守されているだろうか。改革者の福音主義と

からカルヴァン自身をして語らせる優れた手法で、夫としての人間カルヴァンを描いている。同種の著作と異なり、復活の主の御前における「肉親の交わり」にふれるなど、慰めに満ちた小品である。それは又、ベーズのカルヴァン伝や「カルヴァンの祈り」に満ちる靈性に通じる。

この論集は、カルヴァンの生涯と神学を組織的に論じたものではない。歴史的課題としてはカルヴァンとユマニスムとの關係など、又、神学的には「キリストとの一体」をめぐるなど、著者に尋ねなかつた論点も残る。ただ、本書の特色の一つは、著者が単にカルヴァンの信仰の真髄を示すに止まらず、本書においてカルヴァンがそうであつたような厳密で穩健な聖書主義を堅持している点にある。今日の神学的傾向は、一方でキリスト中心主義を掲げつつも、他方、聖書そのものから大きく逸脱する危険をはらんでいる。著者がなぜ本書を通して、かくまで改革者の聖書主義を力説しなければならなかつたかが分る。読者が本書と出合うことによってカルヴァンと出合い、カルヴァンを通して「聖書の真理とキリストの現臨」に導かれるならば、「神讃詠」をその人生と神学の目的とした著者の願いは全うされたと云えようし、本著作集刊行の意義も全うされると云ふべきであろう。

(日本フリースツジスト東住吉教会牧師・大阪基督教短期大学教授)

小島 伊助著

「小島伊助全集」

一九八三—八四年 いのちのことば社

小林 和 夫

キリスト教の本質に触れようとするものにとって欠く事の出
来ない良書が出版されたことを何よりも先に感謝したい。

著者自身の言によると「福音」誌、本年七月号）この全集
は、著者が久しく主筆として書き続けて来られた月刊「福音」
の生み出したものとの事である。著者は関西聖書神学校で長い
間、学生を指導し、多くの聖書の講義をなされ、超教派的に御
用を続けて来られたので、まさに、その生涯の集大成と言うこ
とが出来よう。こうした偉大な全集の評論など評者の力量に余
る事なので、これから読まれる方に、参考となれば思いつつ筆
を進めてみよう。

周知のように著者は、バックストン先生の高弟であり、その
福音理解は師バックストンのそれを正しく継承した人物であ
る。継承と言っても、その教えに追従したと言うだけではなく
著者自身の宗教経験として、その師の言うところを捉えたので
ある。バックストンはキリスト教の福音とは「カルバリーとペ

ンテコステ」「血汐と御霊」の福音であると説き、その二点に
福音理解の鍵となる焦点を置いたのであった。
換言すれば、十字架による恩寵と聖霊による交わりの強調で
あった。

多くのいわゆる正統主義的な教会においてさえ、客観的な贖
罪の恩寵の強調はなされて来たが、聖霊による交わりの面はな
おざりにされて来た感がある。そこに日本のキリスト教の貧困
さを見てはゆき過ぎであろうか。

もともと、バックストンの来朝は、新神学の導入や、理論的
教条主義に傾いて行きつあった日本のキリスト教会に「生け
る主」との交わりの強調を注ぎ込んだのであった。そしてその
弟子である著者は、今日（現代）の日本のキリスト教会の中に
この全集によって、その師の云う所を見事に結実させており、
こうした「生ける主」の臨在の強調が書物によって残された事
はこれからの日本のキリスト教信仰の活性化にとって大きな役
目を果たしたとさえ言う事ができる。この意味で教職、信徒を
問はず必読の書である。

さて、内容には説教（I—III）、聖書講解（IV—VI）、論説、
随筆、紀行文（VII—IX）など、著者の全生涯にわたる福音誌を
支えた福音そのものの論述がなされており、その筆緻は誠にす
ぐれており、その表現は文学的格調の高さをもっている。ここ
ではその一つ一つの論評をすることよりも、その全体像を簡単
に紹介して見たい。

著者の説教や論述を読んで行くと、もちろんその一つ一つに
固有なメッセージがあるが八十年におよぶ説教者生活という長
さの中には著者のライフメッセージとも云うべき、一貫した一
つのメッセージが浮びあがって来る事に読者は気づくであろ
う。

こうした膨大な作品に見られる。著者のライフメッセージを
一言で表現する事は大変にむずかしい事であるが、本誌のよう
な神学的性格の書評には敢えて、神学的表現をもってそれを表
せば「みことばによる、聖霊論的、キリスト論」の強調と言う
事になる。これは今、全集が発刊されつつある笹尾鉄三郎
師の弟子車田秋次師の「みことばによる、救済論的、聖霊論」
の強調というライフメッセージと比較すると大変興味深いもの
がある。以下それを多少、分析的にとりあげて見る事とする。

①「みことばによる」——聖書に根源をおく福音。プロテスタ
ントであれば当然のように受けとられているこの点が、みこと
ばこそカルバリーとペンテコステの証言であり、またそこに証
されているキリストの贖罪は文字による事柄の理解に止らず、
聖霊によって与えられる生命的なりアリティとして捉えられて
いる。ここではキヤノンが単なる信仰告白の教条としてではな
く、文字通り、「救いと信仰生活の規範」としてその生涯に絶
対的な指針を与えており、著者はこれを生活の中で「みことばを
味う」事として実践されている。「ジクジク（字句字句）みこ
とばを味う」とは著者自身の聖書との生ける関係をよく表す表

現であろう。

そして、この関係の中に根源的に聖霊の働きが前提されてい
る。したがって正統主義的な霊感説を云々すれば著者のそれ
は、ウォーフィールドやホッヂなどのように「真理の誤らざる
知識の伝達」よりはむしろ、J・オアなどのように「キリスト
にある生命的なものの伝達」と言う点にアクセントがある。

しかし、著者とみことばとの関係はさらにみことばの文字に
機械的にとらわれることなく、時には自由にそのみことばのザ
ッへ（真意）に聖霊によって導かれる。言わば聖霊の照明（イ
リミニーション）の実践的経験である。この辺りの消息を著
者は「フト感」と言う言葉でユーモアを交えて語る、「啓示
とか靈感とか言うにはおそれ多く、随想と言うにはもったいな
い、その中間をとってフト感じるので、フト感」と説明する。
表現はおおらかであるが事柄はシビアである。これを欠くい
わゆる聖書信仰者がどんなに多い事か。

②「聖霊論的」強調

著者にとって聖霊は何にもまさって、キリストの霊である。
「カルバリーなくしてペンテコステなし、ペンテコステなくし
てカルバリーなし」とはそれで、聖霊自らをキリストのかけに
隠しつつ、キリストのみわざの栄光と臨在を完成する事によっ
て、存在を顕す「御方様」である。この聖霊はカルバリーの御
業を照射し、その実体を解きあかされるだけではなく、生ける
キリスト及びそのみわざとキリスト者とを、その信仰によって

合体せしめるのである。主の「臨在」と言う言葉は著者によりよく用いられる言であるが、信仰によってキリストと合体せしむる聖霊の存在が「臨在」のリアリティに人を導く根柢であると捉えられている。事は神秘性をもつが神秘主義では断じてない。これが著者の否、福音の鍵であろう。「交わり」の原点はここに在る。

③キリスト論的性格

かつてグリスフ・トーマスは「キリスト教はキリスト」(Christianity is Christ)と言う書物を書いてキリストの人格とみわざを高調したが、著者のライフ・メッセージの本質はここにあると言えよう。作品の中に見られる著者のキリスト観は極めて救済論的、機能的キリスト論の強調にある。そしてニカヤ、カルケドンの正統主義的なものを土台にはいるが、その説く所はさらに実践的である。

評者は学生時代に著者が「ニカヤ会議や教会々議がイエス・キリストは神なりとしたから彼は神なのではなく、イエスが神であるから、教会はそう告白せしめられたのである」と力強く説かれた事を聞いた事がある。

著者のイエス伝は、聖書そのものに密着して述べられており、受肉、成長、伝道、贖罪の完成等地上のイエスの姿が浮き掘りにされている。同時にエペソ・ピリピ・コロサイ書等の講解を見ると、血汐による贖罪を起点として、聖霊によってキリスト者の中に「内住する主」、また栄光の天とのキリストがパ

ウロの言う通りに姿をあらわす。

実に地上のイエスはカルバリーの贖罪主であり天上のイエスは栄光の主である。しかもこの天上のイエスはベンテコステの御霊によってキリスト者の中に住む生ける栄光の望みの主である(コロサイ一の27)。

小島先生の福音、メッセージの中心はこのキリストである。

著者は若し神学を論ずるなら、それにそぐなう充分な能力を与えられた英才である。しかし彼は「論やイデオロギズムを選ばず、パースン、御方様を求めた」のであった。その彼の生涯がこのメッセージを生み出したのである。栄光は彼の主にのみあれ!

(東京聖書学院院长)

Arthur P. Johnston The Battle for World Evangelism

(Tyndale House, Wheaton, 1978, 416 pp.)

中村 敏

最初に個人的な関わりで恐縮であるが、評者がトリニティ神学校に留学していた時に御指導いただいた、アーサー・ジョンストン博士の著作をこの誌上で紹介できることは、大きな喜びである。エキュメニカル運動の研究に関して、福音派陣営における権威者である著者について、日本では余り知られていない様に思われるので、簡単に紹介してみたい。

彼はホイートン大学で学んだ後、フランスにTEAMの初代宣教師として派遣されている。フランスで二十年程奉仕をし、フランスにおけるTEAMの指導者として活躍している。そしてフランス在住中にストラスブルグ大学で学び、哲学博士号を受けている。彼は優れた宣教学者であり、教育者であると同時に、本書で取り上げられているベルリン会議やローザンヌ会議を始め多くの国際的な伝道会議に出席し、積極的な関わりを持つている。現職は、トリニティ神学校の宣教学部の教授である。

本書の題を邦訳すれば、「世界伝道のための戦い」となる。

本書は、今世紀の初頭から七十年代に至る迄、世界宣教の理念や実践をめぐって、いわゆるエキュメニカル派と福音派の間でなされてきた戦いを、鋭く描き出した意欲作である。著者は本書の出版に先立って、World Evangelism and the Word of God という書物を一九七四年に出している。内容的に言えば、本書はこの書物の続編といって良いであろう。両者の関わりについて言えば、先に出された書物の方は、一九一〇年のエジンバラ宣教会議以来のエキュメニカル派の宣教理念や実践を、歴史的文脈の中で掘り下げ、福音派の視点からその問題点を指摘したものである。それに対して本書は、前半において同様な内容をより簡潔な形でまとめつつ、ただ単にエキュメニカル派の批判・分析にとどまらず、福音派の宣教理念をベルリン会議とローザンヌ会議を中心として、積極的に打ち出している。

著者によれば、本書の課題は三つある。一番目は、エジンバラ会議以来形をなしてきたエキュメニカル運動によって、国際大会の都度方向づけられてきた伝道論と対照する形で、福音派にとって福音のメッセージとは何か、ということを示唆することである。このことが、主として本書の一章から四章までに展開されている。

二番目は、エジンバラ以降、福音派から見ても世界伝道が変質あるいは停滞していく中で、台頭しつつある福音派の活動の必然的な結果としてのベルリン伝道会議を取り上げ、その意義や影響を探ることである。これが、本書の五章で取り扱われる。

三番目は、様々な意味で世界の福音派の活動のクライマックスをなすと著者が考えるローザンヌ会議に焦点を合せ、その意義や課題を検討することである。これが、本書の七、八章をなしている。

本書によれば、エキュメニカル運動を把握する上で、一九一〇年のエジンバラ会議の考察は、極めて重要である。何故なら、今日に至る迄のエキュメニカル運動を性格づけている神学及び方法論の原則が、この会議において明確に出ているからである。著者はこの歴史的な宣教会議を分析し、聖書の権威がキリストの権威にとって代られたことを指摘する。そして福音派にとって生命線とも言える聖書の不可謬性 (Infallibility) は、全体の組織的統一を優先したために犠牲となり、もはやエジンバラ会議は、福音的性格を持たないと評価する。

かくてエジンバラ以来エキュメニカル派の宣教理念は、聖書の至高の権威という核を見失って多様化し、その時代その時代の神学傾向に受容的になり、従来の救霊中心の伝道のあり方から、一八二八年のエルサレム大会における「社会的福音」の台頭、一九三八年のマドラス大会における「拡大された伝道 (Larger Evangelism)」の強調から、戦後の諸大会を終て一九七三年のバンコク大会に至る迄のエキュメニカル運動がたどってきた道を、明確に描き出している。

そしてその様な中で形成されて来たエキュメニカル派の神学

について、次の様にまとめている。まず聖書の権威の強調から、キリストの主権性の強調への転換である。そしてユニヴァーサルイズムが浸透していく中で、個人の罪の問題は社会環境の問題へと焦点が移され、すべてに対話的、包容的な姿勢が出て来ている。こうした傾向は、エキュメニカル運動の担い手である WCC に、東方教会やローマ・カトリックが加わっていく過程で一層強くなり、宗教改革以来の「聖書のみ」、「信仰のみ」、「恩寵のみ」の原則が大きく揺らいでいる。

その結果として、宣教 (Mission) や伝道 (Evangelism) は、本来持っていた「派遣」や「告知」という歴史的な意味を失っている。そして伝道における優先順位が混乱し、個人の救霊よりも次第に社会体制の改革が前面に出てくるようになっていく。エキュメニカルな神学が、誤りなき神の言葉への確信を失った時に、同時に聖霊のダイナミックな力をも失ったと言えよう。

さて本書の後半において著者は、それでは福音派のよって立つべき宣教理念とは何かを追求している。まず一九六六年、世界的に台頭して来た福音派の旗上げとなったベルリン伝道会議を、画期的なものとして評価している。この会議の標語は、「一つの民、一つの福音、一つの業」であった。この会議においては、「伝道とは、人々がキリストを救い主として受け入れ、教会の交わりの中であってキリストを王として仕えること」と定義されている。そして伝道においては、個人の救霊こそ最重要

要事であり、その立場こそ新約聖書から宗教改革、そして近代のリバイバルズムと連なるものであるとされる。そしてエキュメニカル派と対照する形で、キリストの権威を歴史的に裏づけるものとしての聖書の権威が強調されている。

しかしベルリン伝道会議において懸案となった課題もあり、一九七四年のローザンヌ会議へと引き継がれている。この会議の標語は、「全世界に神の御声を聞かしめよ」であった。著者は、このローザンヌ会議を「教会史家をして、その壮大さと重要さにおいて圧倒するもの」として、大きく評価している。そしてこの会議で採択された「ローザンヌ誓約」を、敬虔主義、リバイバルズム、そして福音主義の最も良き伝統の上に立つものとして位置づけている。

ローザンヌ会議は、聖書のみが不可謬の権威であることを宣言し、伝道の基本的な意義づけにおいてベルリン会議と同一線上にあったが、強調点の相違もあった。すなわち、ベルリン会議に比べると、救われた個人よりも目に見える機構としての教会に、伝道のより大きな責任が与えられている。またこの会議の立役者の一人となったジョン・ストットは、「宣教 (Mission)」を「伝道」と「奉仕」の二面性を持つ言葉として拡大解釈している。

著者はローザンヌ会議及び誓約を詳細に検討し、卒直にその長所や弱点を取り上げているが、特に聖書の靈感について、より厳密な表現を求める人々の不満を指摘している。著者はあく

までも、ローザンヌを完結した歴史上の出来事ではなく、「過程」としてとらえている。事実その継続委員会、福音派の枠組みを守りつつも、エキュメニカル派の理念のあるものを取り入れていきつつある。

結論の部分において、今日の世代の伝道にとって脅威となりつつあるものとして、「聖書の権威」、「聖書と伝承の関係」、「教会の使命」の問題の三点を取り上げ、なおも続く戦いにおいても、忠実に伝道に励む様に訴えている。

とにかく本書を読んで感じることは、エキュメニカル運動そのものを深く学んだ上で、著者が福音派の立場より適確な評価を下しているということである。今日の世界において、従来のプロテスタント、ローマ・カトリック、東方教会という歴史的な枠組みを超えて複雑な様相を見せるエキュメニカル運動をどうとらえ、福音派としてどのような宣教をめざすべきかという点において、本書は極めて重要な著作である。

(柏崎聖書学院院长)

会員研究業績リスト

一九八四年四月〜八五年三月

(著者氏名) (著 書・論文・訳 書 名)

〈東 部〉

稲垣 久 和・市場経済とキリスト教倫理

(発行所・掲載誌) (発行年月日)
『キリスト教と諸科学』クリス
チャン科学者の会編 八四・九

稲尾 三 活・使徒行伝と現代
・技術社会における生命倫理
・自然法と近代認識論
・ホーリネス神学とキリスト宣教教育

『基督神学』東京基督神学校
十字架の教社 八四・十二
八五・三・一
八五・三・一
八四・七

泉田 昭・日本政治を考える
小林 和 夫・福音の輝き(ロマ書構解)
今野 孝 蔵・神の教会南アジア十ヶ国旅行記
丸山 忠 孝・キリスト教会二〇〇〇年
・プリンスストン神学におけるスコットランド常識哲学の
影響

いのちのことば社
日本ホーリネス教団出版部
アジア神の教会連盟
いのちのことば社
『途上』十四号思想とキリスト
教研究会
いのちのことば社 八五・一・二八
八四・六・十一

増田 誉 雄・P・ワグナー著『あなたの賜物が教会成長を助け
る』(訳)
湊 晶 子・女性のほんとうのひとり立ち

いのちのことば社
東京基督教短期大学『論集』第
十七号 八五・三・二五
柏崎聖書学院『論集』第三号
キリスト教史学会『キリスト教
史学』三八集 八四・十二
東京基督教短期大学教授会 八五・三・二五

中村 敏・柏崎地方のキリスト教の歴史
・日本初期プロテスタンティズムに及ぼした福音同盟会
の影響
西 満・創世記一章の創造の日の解釈についてⅢ——梓組説

いのちのことば社
ニューライフ出版社
『びぶりか』十一号聖書同盟
『文芸言語研究』九 八四・四・二十
八四
Vetus Testamentum 33 1983
八四
八五・二・十五
(再版)
八四・十一・五
八四・十・
八四・七・十五
八四・七・二三

大島 義 隆・レイトン・フォード著『友へのかけ橋』(共訳)
大滝 信 也・ユダヤ思考とギリシャ思考 開かれた聖書
尾山 令 二・格・神のことばを見た
小山田 格・ウガリト語研究(3)ケレト叙事詩のプロローグにつ
いて
津村 俊 夫・Literary Insertion (AXB Pattern) in Biblical
Hebrew.

宇田 進・福音主義キリストと教とは何か

上沼 昌 雄・生命をみつめる(共著)

・なお問われなければならないこと——生と死の意味
・生命倫理を確立することはできるのか

・J・ボイス編『聖書の権威と無誤性』(訳)

いのちのことば社
科学技術と経済の会二二二号
EMFジャーナル・福音主義医療
関係者協議会
いのちのことば社 八四・七・二三

油井 義昭・生命をみつめる (共著)

・実践的適用 (釈義と説教) 新約聖書における旧約聖書の引用の問題をめぐって

いのちのことば社
日本福音主義神学会
八四・十一・五
八四・十一

〈中部〉

牧田 吉和・H・バーフィンの聖書論——その基本的性格をめぐって——

『改革派神学』第十七輯
神戸改革派神学校
中京大学教養論叢二五巻一、二、三
八四・十二・一
八四・五・二十
八四・十二・二十

安村 仁志・初代ラスコーリニキにおける反キリスト論(1)・(2)

〈西部〉

有賀 喜一・教会成長十の条件 (監修)

・山森鉄直著

『日本の教会成長』(訳)

唄野 隆・聖書一日一章新約

・現代に生きる信仰

いのちのことば社

いのちのことば社

杉野記念出版会

すく書房

『福音主義神学』十五号

関西ミッショナリーサーチセンタ

法律文化社

すく書房

『神学と人文』二四集・大阪基督教短期大学・神学院

Christian Alternatives to

八四・十二・十
八五・一・十四
八五・二・十二
八五・三
(再版)
八四
八四・七
八四・十二・十
八四・六・二十
八四・十二
1985

春名 純人・哲学と神学

・E・スフールマン著『技術文化と技術社会』(監訳)

服部 嘉明・旧約に見る三一論的宣教理念の一考察

・Appraisal of Ancestor Worship in Perspective

of God's Covenant

・チャールス・ファイファー著『旧約の歴史』(共訳)

市川 康則・アブラハム・カイパーの「領域主権論」——その序論的考察I

Ancestor Practices, ed. by
Bong Rin Ro, Taichung,
Taiwan: ATA
聖文舎

神戸改革派神学校

入船 尊・日本伝道の課題

すく書房
日本基督教改革派西部中会、文書委員会
『福音主義神学』十五号
日本福音主義神学会
『神学と人文』第二四集
『神戸ルーテル神学校神学誌』第七号
八五・三
(再版)
八四・十二・一
八四・六・二十
八四・十・三十
八四・十一

石丸 新・新約聖書における旧約聖書の引用の問題をめぐって

久保田 周・アシヨールカ王のブラークリット碑文研究(1)
正木 牧人・「ルター」のローマ書講義」における信仰論

八四・十二
八四・十二・十
八四・十二・十

松見 睦男・愛情一杯の子育て
鍋谷 堯爾・旧約聖書からの説教

いのちのことば社
聖文舎
いのちのことば社
いのちのことば社
『尾形・森本退官記念論集』山口書店

清水 汎・小説の枠組としての聖書

『尾形・森本退官記念論集』山口書店

・ジョン・スタインベック著『たのしい木曜日』(訳)

D・ソールハイム・The Challenge from Asia

市民書房
FAST GRUNN, Oslo
八四・十一・三十
Fall, 1984

・ Nominal Christians and Drop Outs in Japan
・ Mission from Asia
鈴木 英 昭・ D・ M・ ロイドジョーンズ著『働くことの意味』(訳)

Norsk tidsskrift for misjon, Spring, 1985.
Oslo
FAST GRUNN, Oslo
いのちのことば社
Fall, 1985
八五・二一

全国理事会報告

書記

高 橋 久 之

。一九八五年五月二十七日、愛知県中小企業センター

出席者 (東部) 横山 武、丸山忠孝、小島彬夫、内田和彦、

(中部) 黒川雄三、牧田吉和、(西部) 安田吉三郎、鍋谷堯爾、
高橋久之。

報告

(1) 東部、中部、西部の各部会活動の報告と十五周年記念事業
の準備情況について。

(2) 会員名簿の作成、配布について (八百部印刷ワープロ使
用)。

(3) その他。

主要議事

(1) 新役員の人事について

理事長 安田吉三郎

副理事長 横山 武、黒川雄三

書記 佐布正義、高橋久之

会 計 小島彬夫、工藤弘雄
会 誌 鍋谷堯爾、牧田吉和、内田和彦

(2) 一九八五年度決算報告 (別記) の承認

(3) 十五周年記念事業としての第三回研究会議について

。テーマ「福音主義の聖書釈義と説教」

。日時 一九八五年十一月二十五～二十七日

。会場 準備委員会の方針に従う

(注) テーマの中心は聖書釈義から説教という流れの中で全
体を構成する。

(3) 学会誌広告掲載の件

広告掲載に伴う収入の支途について次のようにきめた。

。最終的基金の目標を百万円とする。

。若手研究者の助成を積極的に進めるため現在の編集担当理
事が具体案をまとめて、第三回研究会議中に開かれる理事会
に提案する。

(4) 全国会計の一九八五年度予算案 (別記) を承認する。

1984年度 日本福音主義神学会会計報告(全国)

		予 算	決 算	増 減
収 入	費 金	900,000	936,400	▽ 36,400
	代 越	100,000	51,000	49,000
	誌	900,000	634,840	265,160
	会 費	168,803	168,803	0
	計	2,068,803	1,791,043	277,760
支 出	会 誌	900,000	905,980	▽ 5,980
	部 費	450,000	450,000	0
	理 事 会 費	200,000	148,840	51,160
	名 簿 代	100,000	100,000	0
	事 務 費	10,000	9,820	180
	借入金返済	390,000	100,000	290,000
	予 備 費	10,000	0	10,000
	繰 越	8,803	76,403	▽ 67,600
	計	2,068,803	1,791,043	277,760

会誌売上代 439,840

会誌広告代 195,000

会 誌 代 800,000

会誌編集費 105,980

1984年度 会誌出版基金会計報告

基金総額	698,022
(内訳)	
献 金	5,000
貸出金返還	100,000
貸出金残金	290,000
前年度繰越	303,022

1985年度 予算(全国)

収 入		支 出	
会 費	900,000	会 誌 印 刷	950,000
献 金	150,000	部 費	450,000
会 誌 代	650,000	理 事 会 費	200,000
広告収入	500,000	事 務 費	10,000
		記念会、研究会議準備費	100,000
		借 入 金 返 済	290,000
		出版基金、研究助成費	210,000
		名 簿 作 成	50,000
		予 備 費 ・ 繰 越 金	16,403
繰 越 金	76,403		
	2,276,403		2,276,403

(出版基金会計へ)

東部部会活動報告

(一九八四年八月より一九八五年七月まで)

東部部会書記

大 滝 信 也

一九八四年度

。九月十日(月) 夕、「高度技術社会と倫理」研究会がお茶の水学生キリスト教会館KKK事務所で行われた。

「七月五日に日本カトリック司教団によって公表された胎児の生命の尊厳についてのカトリックの見解をめぐって」

発題者 稲垣 久和氏

。九月二十一日(金) 午後五時二十分から八時三十分まで、お茶の水学生キリスト教会館旧館四二〇号室で、理事会が持たれた。出席者十一名。欠席者七名。秋の研究会の準備をした。学会誌のバックナンバーの処理法について話し合った。十五周年神学研究会議の準備をした。理事会の部門構成について話し合った。東北部会の発足に向けて積極的に考えて行くことにした。会員審査が行われ、二名の入会希望者が正会員として認められ、西部よりの一名の転会希望者が準会員として認められた。

。十二月二十六日(月) 午後零時三十分から五時三十分まで、

お茶の水学生キリスト教会館旧館二二三号室で、秋の研究発表が行われた。

礼拝(零時三十分～一時)

説教 モーリス・ジャコブセン氏

研究発表(一時～五時三十分)

。中田重治の聖書信仰

。ヨハネの福音書研究の最近の動向

。「ドイツ敬虔主義をめぐって」

。「日本の社会における礼拝共同体の形成」

。「神を見る」——旧約聖書神学の問題として

。「パウロのアレオパゴス説教」

。「宣教学の現代的課題」

。「キリスト教政治神学の成立をめぐって」

小平 牧生氏
三上 章氏
原田 憲夫氏
後藤 牧人氏
高力弘一郎氏

約五十名の出席があった。

。役員会 九月 七 日(金)

十月二十六日(金)

一九八五年度

。三月一日(金) 午後五時から八時三十分まで、お茶の水学生キリスト教会館で、理事会が持たれた。出席者七名。欠席者十一名。春の総会と研究会の準備をした。十五周年記念会・第三

回神学研究会議の準備をした。本田弘慈氏と瀬尾要造氏を正会員から名誉会員に推薦することにした。会員審査が行われ、一名の入会希望者を正会員として認めた。

。六月十七日(月)午後一時三十分から六時まで、お茶の水学生キリスト教会館旧約一階チャペルで、第十六回総会・研究会が行われた。研究会には、約六十名の出席があった。

礼拝(二時三十分～二時)

説教 藤井 力氏

総会(二時～三時)

議長 横山 武氏

研究会(三時十五分～六時)

主題「福音主義聖書解釈の基本的問題」

司会 津村 俊夫氏

発題者 中沢 啓介氏、安納 義人氏

野口 誠氏、内田 和彦氏

。役員会 三月一日(金)

五月 十八日(木)

。十五周年神学研究会議準備委員会

六月二十七日(木)

中部部会活動報告

中部部会書記

内 村 撒母耳

一、一九八五年(第四回)中部々会総会報告

日時 一九八五年五月十三日(月) 十時半～十二時

会場 愛知県中小企業センター7階一会議室

参加者 一一名

議決事項

一、前年度行事報告 会計報告 承認

二、新年度 行事計画 予算を承認

三、七月二十二日～二十四日、宇田 進師の集中講義(目的は牧師の継続教育)の後援については理事会に一任

二、一九八五年、公開講演会

(1) 日時 一九八五年五月十三日(月) 午後一時～四時三十分

会場 愛知県中小企業センター7階一会議室

稲垣久和氏が生命科学とプロテスタンティズムの倫理と題する講演を行ない一九九人が参加した。

(2) 日時 一九八五年五月十三日(月) 午後六時三十分～

八三十分

会場 愛知県中小企業センター

稲垣久和氏が「進化論とキリスト教世界観」と題する講演を行ない二六人が参加した。

三、その他

。八五年七月三十一日現在の会員数

名誉会員一、賛助会員一、正会員三四

。八五年秋の研究発表会

十一月十一日午前十時三十分～午後二時三十分 於同盟福

音金山教会

発表者 旧約より エミール・ミウラ師

新約より 明田勝利師

。明年度総会は一九八六年五月十二日とする。

。今年は役員任期二年目であるのでそのまま。

西部部会活動報告

(一九八四年七月より一九八五年七月まで)

西部部会書記

高 橋 久之

一、第十回西部部会総会報告

日時 一九八五年五月

場所 神戸基督教改革宗長老教会

礼拝 増永 俊雄師

議 事

(1) 一九八四年度活動報告、決算報告の承認

特に九州地区活動援助の件

会計については

収入合計 四四一、五五一円

支出合計 三九一、一四二円

本部給付 五六七、七二〇円

(2) 改選理事の投票結果と九州、四国地区担当理事の選任結果の報告承認の件

西部々会会員一五四名(海外会員を含む) 中八二名の投票

があった。その結果、有賀喜一、中島 守、鍋谷堯爾、橋本

竜三、唄野 隆、服部嘉明の六氏が選出された。

なお、九州担当理事は、窪寺俊之、山中 猛の二氏、四国担当理事は鈴木英昭氏が選任された。

(3) 予算案の審議、承認の件

総額、五〇九、七四六円が計上された。(支出増額のおもなものは、会員相互の情報提供と九州、四国地区活動援助費に充当)

研究発表

「生と死をめぐる」というテーマのもとに、中島修平氏(フラー神学校大学院博士課程在学中)、中島美知子氏(那覇オリブ山病院医師)のご夫妻で「痛みの神学的解釈と末期ケアへの応用——癌性痛を中心として」、久保考司氏(淀川キリスト教病院チャプレン)より「死の様態についての考察」、窪寺俊之氏(折尾女子経済短大助教授)より「牧会的配慮から見た死の問題」という研究発表をいただいた。

二、理事会活動

。一九八四年八月二十七日、神港教会にて

主要議事

- (1) 新入会員受け入れ
北野耕一氏(フィリピンのFEASTの学監)
- (2) 秋の研究会議の準備

「ヨナ書における反復」
「聖書の翻訳と解釈」

村田 充八氏
服部 嘉明氏
安田吉三郎氏

。一九八五年一月七日 鍋谷理事宅

主要議事

- (1) 新入会員の受け入れ
浜岡正年氏(京都福音自由教会)
- (2) 西部部会年次総会の準備
村田充八理事留学について

。一九八五年三月十八日 高橋理事宅

主要議事

- (1) 新入会員受け入れ
相沢 寛氏(日本フリーメソジスト教団、東住吉教会牧師)
H・A・ネトランド氏(日本福音自由教会宣教師)
- (2) 退会届受理

石川良和氏、五島 勝氏、武井亮二氏の退会を認め、今までのご協力を感謝する。

(3) 西部部会総会の準備

若返りをはかると同時に、九州地区担当理事二名、四国地区担当理事一名をおく。

(4) 学会誌、名簿の作成について

- (3) 学会誌について、広告、販売の内容、方法について
- (4) 特別講演会の開催について
キスティーカー博士の講演を九月七日、神戸改革派神学校で行う

(5) 十五周年記念研究会議について

。一九八四年十一月十九日、神戸ルーテル神学校にて
主要議事

- (1) 会計、学会誌、九州地区活動、韓国の福音主義神学会の動向、名簿の訂正(略)の報告
- (2) 学会誌一六号の編集について
- (3) 秋の研究会議について
日時 十一月十九日、神戸ルーテル神学校

研究発表

「日本における聖書的神観の確立をめざして——インドネシアから学んだもの」
入船 尊氏
橋本 昭夫氏

(4) 九州地区活動報告

日時 十一月五日、福岡新生キリスト教会
研究発表

「聖書における文化の取り扱い(その2)」 山中 猛氏
「現代経済と福音」 東條 隆進氏
「福音主義視点における技術的規範と人間の責任」

。一九八五年五月二十日 神港教会にて

主要議事

- (1) 昨年中の会員異動について
- (2) 新入会員の受け入れ
淵上英一郎氏(日本基督長老教会、福岡七隈キリスト教会)
東 正明氏(日本アドベントキリスト教団)
- (3) 一九八五年度新役員の選任
理事長 安田吉三郎氏

会計 工藤 弘雄氏
書記 高橋 久之氏

(4) ミニ通信の発行について

年三回、会員に情報を提供する。

- (5) 学会誌の広告対策(全国理事会へ)
- (6) 理事の活性化対策

規約改正を含めて全国理事会で対策を考えるように提案する。

(7) 研究発表者への支出諸費用の原則について

賛助会員への感謝

日本福音主義神学会の運営は、次の賛助会員、諸教会、諸団体によって支えられております。ここに心からの感謝を申し上げます。

〔東部部会〕

日本基督バプテスト連合宣教団
東京基督教短期大学
柏崎聖書学院
東京聖書学院
東京基督教神学校
聖契神学校
中央聖書神学校
日本キリスト改革派仙台教会
日本キリスト改革派静岡教会
中央福音教会
練馬バプテスト教会
日本福音長老教会菊名西教会
日本キリスト改革派東京恩寵教会
日本キリスト長老久我山教会
練馬神教会

〔中部部会〕

墨 鉦 平

〔西部部会〕

青谷ルーテル教会
大阪基督教短大神学科
関西聖書神学校
神戸改革派神学校
神戸キリスト教書店
神戸ルーテル神学校
神戸ルーテル聖書学院
四条畷キリスト教学院
日本キリスト改革派神港教会
日本キリスト改革派伊丹教会
日本キリスト改革派宝塚教会

「福音主義神学」執筆についてのお願い

日本福音主義神学会編集委員会

一 文体、用語

原則として文体は国語体、漢字は常用漢字、仮名づかいは現代仮名づかいを使用した平明な表現でお願いします。原稿はタテ書、四〇〇字詰原稿用紙を用いること。論文中のヘブル語の表記は音写による（カナまたはラテン文字）。ギリシャ語の原文のまま使って下さい（特にアメセント、ブリージングを正確に付けて下さい）。

二 枚数

論文は四〇〇字詰原稿用紙四〇〜四五枚、紹介、書評は五〜一〇枚程度といたします。枚数が超過して提出された場合、書き直しをお願いすることがあります。

三 締切期日

論文は毎年六月末日までに所属する部会（東部または西部）の編集者に提出して下さい。書評、紹介等は七月十五日まで。

四 論文、書評の依頼は編集委員会が行いますが、論文を投稿することもできます。この場合は所属部会の編集者に原稿を提出し、編集委員会の審査を受けることになります。いずれの場合にも、原稿の最終取捨選択権は編集委員会にあります。

150

五 注記

注は本文の後に通し番号を付け、一括して下さい。引用文献等の表記の仕方は別記参照のこと。

六 校正

論文の再校以降は原則として編集委員会で行ないます。なお、校正時における訂正は最少限にし、する場合にも、ほぼ同一字数内での差替えを原則とし、数行にわたる組替えを必要とする加筆、削除等は御遠慮下さい。

七 原稿料

原稿料は支払いません。論文については会誌を五部、書評等に対しては二部を執筆者に贈呈いたします。

八 英文概要

論文は英文による概要をタイプ用紙一枚程度にタイプし添付して下さい。

文献の表記の仕方について

一 邦語文献

(イ) 単行本

- ① 佐々木順三『教会暦年の研究』（聖公会出版社、一九三九年）五四頁。
- ② ルネ・パーシュ『イエス・キリストの再臨』（いのちのことば社、一九七八）五三一―四頁。
(ロ) 一つの本の中に多くの著者がおり、その一つ一つが独立した論文になっている場合
- ③ 岸本通夫「印欧語の移動とヒッタイト王国の台頭」『岩波講座、世界歴史』I（岩波書店、一九六九年）一六一―三頁。

- ④ 五島勝「キリスト論的称号の扱いに見るルカの姿勢」『福音主義神学』第二号（一九八一年）五三一―四頁。
(二) 以前に引用した本をつづいて引用する場合

- ⑤ 前掲書 三二頁（または同頁）。

(ホ) 間に別の本が入っている場合

- ⑥ ルネ・パーシュ『イエス・キリストの再臨』（著者名と書名だけ。前掲書を用いない）。

二 外国語文献

一般原則は次の本を、表記の具体例は(a)以下を参照して下さい。

Kate L. Turabian, *A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations*. 4th ed., Chicago:

The University of Chicago Press, 1973.

(a) Books

One author

Paul Tillich, *Systematic Theology*, 3 vols. (Chicago: University of Chicago Press, 1951-63), p. 9.

Three authors

Bernard R. Berelson, Paul F. Lazarsfeld, and William McPhee, *Voting* (Chicago: University of Chicago Press, 1954), pp. 93-95.

More than three authors

Jaroslav Pelikan et al., *Religion and the University*. York University Invitation Lecture Series (The University of Toronto Press, 1964), p. 109.

Editor as "author" (same form used for compiler)

J.N.D. Anderson, ed., *The World's Religions* (London: Inter-varsity Fellowship, 1950), p. 143

Article in a journal

Don Swanson, "Dialogue with a Catalogue," *Library Quarterly* 34 (December 1963): 115.

(g) "Ibid"

When references to the same work follow each other without any intervening reference, even though the references are separated by several pages, the abbreviation "ibid." for the Latin *ibidem*, "in the same place" is used to repeat as much of the preceding reference as is appropriate for the new en-

try:

¹ Max Plowman, *An Introduction to the Study of Blake* (London: Gollancz, 1952), p. 32. [A first, and therefore complete, reference to the work.]

² Ibid

[With no intervening reference, a second mention of Plowman's work requires only "ibid." Notice that "ibid." is not underlined.]

³ Ibid, p. 68.

For a book, a second or later reference to a work already cited in full form, but not in the reference immediately preceding, *omits* the facts of publication, series title, if any, edition (unless more than one edition of the same work has been cited), and total number of volumes. Thus pared down, the reference consists of author's last name, title of the work, with page, and volume number as well, if necessary. Note the full reference in footnote 1 and a later reference to the work as shown in (arbitrarily numbered) footnote 9

¹ Gabriel Marcel, *The Mystery of Being*, 2 vols. (Chicago: Henry Regnery Co., 1960), 1: 42.

⁹ Marcel, *Mystery of Being*, 2: 98-99.

編集後記

日本福音主義神学会創立十五周年にあたって、神学会誌十六号をおくり出すことができたことを感謝している。創立十五周年の挨拶を寄せられた安田理事長、「生と死」のテーマによって論文を寄せて下さった安納、上沼、葛田、中島諸氏、大部で難解な哲学書や経済学の書物、又、著作集などを簡明な書評にまとめて下さった執筆者の方たちに、心から感謝を申し上げたい。

昨年、いのちのことは社出版部及びイマイ印刷の御好意を得て、東部部会から西部部会に編集、出版の実務が移されることになって二年目である。同時に、これまでになかった広告収入を得ることによって、若手研究者にささやかであっても、研究助成の道を開くという方向が決定せられた。今号も、創立十五周年ということもあって、賛助校、賛助教会、聖文舎、いのちのことは社、日本聖書協会、イースター式典社、淀川キリスト教病院、神戸キリスト教書店、イマイ印刷の御協力をいただいた。

又、今号から、賛助会員名をのせることと、会員の研究業績をのせることにしたが、これについても、さらにきめ細かいリストがつくられていくことが望まれている。

六月十八日、牧田、内田、鍋谷の三者は、編集会議をひらき、現在の方角を確認すると共に、

一、編集内容の長期プランをたてること
二、編集実務が若手の編集者（複数）によって、ある程度の継続性をもつようにできること

一、若手研究者の研究助成のためのきめ細かいバックアップの三点を各部会理事会、及び全国理事会にはかることにした。

昨年は、西部部会の村田理事に編集実務がゆだねられたが、本年は同氏の米国留学（四月と九月）のため、急に、田中智恵氏にさしあたったの実務をお願いすることにした。しかし同氏も、アメリカ・ジャクソンの改革派神学校に留学することになり、八月五日に出発、又、正木うらら氏が実務をお願いすることになった。正木うらら氏が困難な編集実務をころよく引き受けて下さったので、八月十四日と九月五日、タンザニアのマクミラ神学大学におけるタンザニア、パプア・ニューギニア神学ゼミナールの講師として、安心して出発できたことを心から感謝したい。神学会学会誌が、理事、会員、及び多くの方たちの祈りと好意、み言と主のからだなる教会に仕える意欲に燃える研究者たち、又、多くのキリスト教諸団体、諸学校、出版社、印刷所などの支えの中で、今後も発展しつづけることを確信しながら、すべての方々に感謝の御挨拶としたい。

一九八五年九月

タンザニア、マクミラにて

鍋谷 堯爾

一九八五年十一月二十日発行

定価 一七〇〇円

編集者	内田和彦
編集実務	鍋谷堯爾
発行者	正木うらら
	神戸市中央区中島通二一三―五 神戸ルーテル神学校内
	日本福音主義神学会
	理事長 安田吉三郎
印刷	イマイ印刷株式会社
	大阪市城東区関目一〇一―二六